

# 今こそ読む この1冊

潮木守一

名古屋大学・桜美林大学名誉教授

佐藤卓己 著

## 『「教育」の時代—物語岩波書店百年史2』

(2013年 岩波書店)

### 元教師の創始者による教育と啓蒙の歴史

アカデミズムと出版界は、切っても切れない関係にある。お互いに依存し合いながら栄枯盛衰の歴史を辿ってきた。岩波書店は日本のアカデミズムを母体として発展するとともに、アカデミズムは岩波書店という土壌を養分として発展してきた。本書はこの相互依存の100年間を辿った全3巻の記録の2巻目である。

なかでも岩波書店にとって「教育」という分野は、このほか切り離せない関係にあった。まずその創始者岩波茂雄がそのキャリアを出発させたのは、教師という職業だったからである。それは岩波茂雄個人の青年期体験となり、岩波書店という出版社の発展の方向を定めることとなった。やがてその青年期体験は岩波茂雄個人のDNAとなり、岩波書店のDNAとなり、日本の歴史の各ステージでの岩波書店の活動を形作った。

もともと農業社会が近代化する初期の段階では、日本だけに限らずどこでも教育に対する期待が高まる。教育は啓蒙とともに、希望に満ちた新知識の唯一の供給源として大きな関心を集める。岩波茂雄個人は子どもの教育のなかに新時代を切り開く突破口をみたのであろう。彼の興した出版活動は、その原体験の延長であり、社会全体を対象とした教育と啓蒙の活動だった。

### 一級品を保証する書籍文化

しかし、昭和という時代は思想とか価値観に異常なまでに敏感な時代だった。特に教育に手を染めるのは危険な時代だった。場合によっては、出版社の命運を決しかねなかった。現に1944年岩波書店の発行する雑誌「教育」は用紙配給を止められ、実質的廃刊の憂き目にあっている。教員赤化事件が起き、教員の思想傾向に敏感になっている時代のなか、岩波書店は岩波講座「教育科学」を刊行している。1931年、満州事変が勃発した年である。



教師としてキャリアを出発させた岩波茂雄にとっては思い入れの強い講座である。この講座を一級品とするため、その質を維持するために、そのなかの一論文を剽窃として発刊後破棄することまでしている。

岩波は自分を「文化の配達人」と定義した。文化を大学の中側に閉じ込めるのではなく、もっと広い社会全般に向かって開放しようとした。それは一つの大学を創設するよりも、もっと

広がりと深みを持った活動だった。しかも常に一流の文化を社会一般に向けて開放することを使命とした。そのことを物語る何よりもの証拠は、岩波書店の刊行物には執筆者の肩書きが印刷されていないことだ。つまり帝国大学教授という肩書きよりも、岩波書店の選んだ執筆者であることがはるかに高い権威を持ち、それだけ高い信頼性を保証した。どこか他の機関のお墨付きに依存するのではなく、岩波書店が執筆者として選ぶことによって、一級品としてのお墨付きを与えたのである。

### 変わりゆく社会・文化を暗示する

それでは書籍文化が危機に瀕している21世紀でも、岩波文化は生き延びることができるのか。この問いに対して著者はこう答える。どのような大インテリでも革命家でもチャンバラ、落語を楽しむことができるが、岩波講座や岩波文庫は「教える」とか「きたえる」という独特な身体ポーズを構えない限り読めない。その結果、そういう身体ポーズがダサくて、汗臭くて、垢抜けない時代になれば、岩波文化は吸引力を失い、黄昏の時代が到来する。現に我々の前に広がっている21世紀とは、コンビニに行けば何でも売っている時代となった。売っていないのは希望だけという超豊穡社会となった。近代化、進歩、啓蒙、教養、教育、向上、努力、忍耐といった大スローガンが通用しなくなった21世紀は、何をよすがとして生きてゆくことになるのか、黙示録的な文章で終わっている。